

附 第一インターナショナルと

ブルードン派
コレクティヴ派
バクーニン派
会議経過

年 代	1864年	9月28日	10月5日	1865年 9月25日 1 29日
国際労働者協会（インターナショナル）	ロンドンのセントマーチンホテルにて国際労働者協会が創立された。呼びかけと仮規則（参照資料2）はマルクスが起草。 総評議会の前身にあたる実行委員会を作る、 成員50名、費用5ポンド。総評議会をロンドンに置き、年次大会を一回開くことなどをきめる。			
年 代	ブルードン派、コレクティヴ派 バクーニン派諸団体			
ロンドン会議	出席・英国代表は急進的労働組合の人びと、フランスはトーラン、ヴァリン等労働者団体代表、スイス代表デュプレクス、ベルギー代表セザール・ド・パープ、ポーランド代表ポブルジンスキー、ドイツ代表レズナーとジャーパー、通信書記としてフランス代表デュ			

1866年 9月3日 8日	ボン、スイス代表ユング、ドイツ代表（ロンドン在）通信書記マルクス 議題 ①ロシア専制政府のヨーロッパにおける悪影響排除。 ②ポーランドの回復。③労働階級の自国内問題とインターナショナルの問題の組合せ等。マルクスはブルードン派を批判 △彼等はあらゆる種類の革命的戦術、私の意味では、階級闘争に基づくすべての戦術、あらゆる種類の集中運動、つまりその結果すべての運動は政治的手段によって実現されるものだが、そのすべてに反対した。例えば労働時間の法規制に反対したV ジュネーヴ会議 22支部代表46名参加。 議題 ①インターナショナルの規約の確定、基本原則の確立。 （ステクロフの意見では民主的中央集権制の確立、総評議会の権限強化だと言う）	ブルードン派 ①女性労働者のインターナショナル参加に反対（女の場所は討論ではなく家庭にある） ②労働時間8時間短縮に反対（インターナショナルは雇主と被傭員の個々の契約に介入すべきではない） ③知識労働者のインターナショナル参加反対（知識労働者のインタ参加は労働者階級社会主義組織の特長を失わせる。何故なら、政治の分野に組織を引つりこむからだ）スイス、イタリア支部はこの説に賛成。
------------------------------	--	---

1867年 9月2日 8日	②資本に対する労働者の闘争に国際的相互扶助を与える。 ③労働者の連帯のために、労働者の実態調査と統計を作成する。 ④労働時間（8時間）短縮。 ⑤女性と子供の労働に対する資本の横暴を改める。 マルクスは「資本論」第一巻の印刷のため欠席、スイス代表としてギヨム出席。 ローザンヌ会議 代表21名参加。 議題 ①組織問題として4半期毎に総評議会が各支部へリポートを送ること。 ②ブルードン派はスイスのフランス語系代表の支持を受け民衆銀行とクレジット問題を提案。 ③国家の機能について。 △国家の役割は公共サービス、輸送と交換、集団と個人の利益を保護し、正義の保持者、契約の後見人、処罰の権利を有するV	1867年 バクーニンは△平和と自由の同盟Vに参加、彼の著書△連合主義、社会主義、反教権主義Vはこの団体に呼びかけたものである。
------------------------------	---	--

1868年 9月6日 15日	④労働者階級の政治闘争参加の可否。 a、労働者階級の社会的解放はその政治参加なくしては有り得ない。 b、政治的自由の確立が第一歩として絶対必要である。 ⑤戦争反対決議 ⑥ベルギー代表ド・パーブがコレクティヴィズムについて説明。 ブラッセル会議 代表99名 (フランス18、ドイツ5、イタリア2、スイス7、英国5、総評議会6、ベルギー55、スペイン1) 議題 ①戦争の問題(普仏戦争の危機)ヨーロッパ諸勢力間の戦争問題につき労働者はどんな態度をとるべきか。戦争にはゼネストで闘え、社会の再編以外戦争を終らせ得ない。 ②労働時間の短縮。 ③労働者間の相互クレジット制の確立。 ④機械の導入は社会が平等にならない限り生産者の利益になるだけだ。機械を労働者の手中に納めよう。	1868年 6月 9月 25日	バクーニンはインターナショナルジュネーブ支部に参加、以後6年間インターナショナルで働く。 バクーニンは八平和と自由の同盟ベルン会議に出席ハロシヤ民主主義のプログラムVをインターナショナルのブラッセル会議に送る。 要点。1.財産相続権の廃止、2.男女の社会的同権、3.宗教的、政治的、法律的、市民的結婚制度の廃止、4.すべての政治組織を農業、工業における連合組織に代替すること。 バクーニンは同盟の第2会議より少数者で民主社会主義者国際同盟を創設。プログラムはバクーニンの考えに拠り、中央局をジュネーブに置いた。
----------------------	---	--------------------------	---

1869年 9月2日 12日	⑤ストライキの機会と正当性は組合連合が提案し、各委員会で決定すること。(ブルードン派はストは原理に於て悪く職場を混乱させるとして反対、但し後に軟化) ⑥コミンニストの理念(コレクティヴィズム)が討議される、米国、英国、ドイツ代表は土地と生産手段のコレクティヴィズム(集産制)に賛成。 土地の集産主義についての決議では55名の代表中、賛成30、反対5、棄権15、ブルードン派は農業のコミンニズムに反対。マルクス、エンゲルスはこの傾向を共産主義への一歩前進と評価したが満足しなかった。 バズル会議 代表78名 英国(総評議会)6、フランス26(バクーニンはリヨンの女性労働者達の代表として出席)ベルギー5、オーストリア2、ドイツ10(ベッカー、リープクネヒト、ヘス等)スイス22	1869年 3月9日 10月 12月11日	総評議会は民主社会主義者、国際協会のインターナショナル参加を承認。 バクーニンはジュネーブを去りイギリステ誌の編集をやめP・ロビンが代る。 イギリステ誌の11月号で総評議会の運営を批判、マルクスはイギリステにその権限はないとする。 P・ロビンのインターナショナル追放の原因
----------------------	--	--------------------------------	--

(ギヨム他) イタリア1、スペイン2、米国1 議題 ① リーブクネヒト、リトゲンホウセン等ドイツ代表が民衆の直接立法(主導権と国民投票権)の問題を提出し、インターナショナルがこれを認めるよう要請(政治参加) ② バクーニンとヒンスが反対。 理由、インターナショナルはブルジョワ国家の改革を強化する目的しかない政治運動に参加すべきではない。 ③ エッカリウスが総評議会の名においてインターナショナルの原則を無視する支部の追放を提案、バクーニンはリーブクネヒトと共に総評議会の強化を支持。反バクーニン派はバクーニンが総評議会をスイスに移し支配しようとしているとして非難。 決議 a、本会議は社会は土地の個人所有を廃止して共同所有とすべきことを宣言する。 b、今日重要なのは土地は共同所有とすべきことである。	1870年 9月4日 9月15日 9月17日 9月28日	となる。なおるヶ月後マルクスはバクーニンを中傷した極秘文書を作る。 パリ・コミューン。リオンでは公安委員会が市庁を占拠。これはブルジョワ共和派と少数のインターナショナル派で構成されていた。数日後市政会に改組される。 バクーニンはハアナキズムに拠ってフランスを救えVを合言葉としてリオンに到着。 バクーニンは流動状況を活用してハフランス救国中央委員会Vを設置、成員はアーバトリチャード、ガスパーブランク他バクーニン派。計画では9月26日武装蜂起を呼びかける ① 国家の行政、政治機構の廃止 ② 民事・刑事裁判所の廃止 ③ 税と抵当権の廃止 社会革命の一団市庁へ乱入、フランス救国中央委員会が占拠して各布令を発する。 当局はブルジョワ国民軍を組織して対抗。バクーニン逮捕される。ロシア人亡命者オゼロフの率いる義勇軍により救出され、マルセイユへ遁れた。
--	---	--

1870年 3月28日	バクーニンとヒンスはコレクティヴィズム(集産制)を支持、投票結果は賛成54、反対4(ブルードン派)棄権13、欠席4 バクーニンは相続権廃止について演説する。相続権廃止の採決。賛成32、棄権23、欠席13 形式的採決は実効しなかったが、しかし総評議会の提案(マルクス案)に対する明白な反対を示した。マルクスとバクーニンのイデオロギー闘争の発端となる。 なお次の会議は1870年9月5日パリで開催をきめたが、当局の弾圧が厳しく(フランスでは67年68年にかけてインターを非法組織とし会員15名を100フランの罰金刑に処した)ドイツのメインツに変更した。 ジュネーブにインターナショナルロシア支部を設置、ロシア人亡命者ウチン(ニコ)が長となる。マルクスは支部を利用してバクーニン関係資料を求める。 マルクスはバクーニンを中傷した極秘文書を友人クーゲルマンとドイツ支部へ送る。	1871年 2月13月 10月 他にもこの種の蜂起があった。 マルセイユ(10月31日)労働者が市庁を押さえ(11月4日)鎮圧された。 リオン(11月4日)蜂起失敗。 パリ(10月31日)1871年1月22日蜂起、1871年4月22日リヨンの蜂起を最後とする。 バクーニンのジュネーブ同盟はインターナショナル諸支部からボイコットされ解体、引続きフランス人亡命者達によって再建された。 バクーニンはハドイッ答刑帝国V第一部を執筆。その第二部は資金難のため出版できず、1882年エリゼルクリュとカローカフエイロが原稿から人神と国家Vを編集・翻訳して出版した。 バクーニンはインターナショナルの政治参加について次の意見をもっていた。 ハインターナショナルは一般的態度として政治を排するものではない。ブルジョワ階級との闘争ではそれに巻き込まれるのは必定である。問題は労働者が政党を作るかどうかでこの点では反対だった。
---------------------------	--	---

4月19日	マルクスは女婿ポール・ラファルグへも同じ種類の文書を送る。
7月23日	総評議会が普仏戦争への反戦宣言を行う。
9月4日	フランスで革命が起き共和国宣言が出される。
9月9日	ペーベルW・リープクネヒトはドイツにおける反戦運動のため反逆罪に問われ裁判を受ける。この過程でマルクスの極秘文書の所在をバクニンが知ったが内容は判らなかった。
1871年	普仏戦争始まる。インターナショナルの会議は開けなかった。
8月15日	パリではバリコミュンが進行中。
9月17日	マルクスはインターナショナルの会議で主題を組織問題と政治一般に限定するよう提案。
23日	ロンドン会議 代表23名、内13名が総評議会会員であった。 議題 ①個別的労働婦人団体の支部取扱いについて ②労働者の地位に関する統計収集 ③総評議会と接触をもつ大労働組合の組織方法 なお最大の争点は政治参加をめぐる討議
11月12日	ソングイユ会議 ジュラのインターナショナル、ノシヤテールとベルンの会員、ジュネーブの革命的社會主義者が集会する。 決議 ハインターナショナルは新局面に入った。各支部に対する総評議会の独裁的態度がそれである。ロンドン会議はわれわれにも関係のある問題を決議した。しかも秘密に行い独裁的に布告を出した。これはインターナショナルの原則に反するV バクニンはロンドン会議に参加していなかったが、その過程はギヨムその他を通じ知悉していた。直ちに各地の友人同志に手紙を送った。その結果全イタリアのインターナショナル支部はロンドン会議の決議に反対。 ベルギー支部はブラッセル会議を開き①インターナショナルの規則全文は各支部の権利を制限するものではない。②総評議会は通信と報告のセンターではない。③規則の改定を要求すると決議した。スペイン支部も同調 (スペインインターナショナルは1871年

1872年	マルクスはゾルゲ宛手紙で「今度ハインターナショナルにとって生死の問題になる」と予告しハグ会議の前途を予想した。
6月21日	4 政治参加についての投票結果、賛成14、反対 ないV またウチンがバクニンに関してネチャーエフ事件を提出したがベルギー代表ド・パーブが反論。ハバクニンに対する非難は行き過ぎである。この暗殺話(ネチャーエフの学生イワノフ殺しの事)はバクニンに何の関係もないV
9月2日	ハグ会議 代表65名、内訳総評議会21(マルクス、エンゲルス、エッカリウス等出席)ドイツ19、フランス3、ベルギー9、オランダ4、スイス4(ギヨム、シュヴィツゲール他)スペイン5(ラファルグ他)米國3(ゾルゲ他)ハ
1872年	3月 ポールラファルグがスペイン連合評議会と接触して創設したが既にバクニン派のイタリア人ファネリが1869年にスペイン支部を設定していたのでマルクス派とバクニン派が対立、形勢はバクニン派に有利だった)
3月	バクニンはイタリア各地のインターナショナル支部、労働団体と接触する。 総評議会について意見を述べ、スペイン支部やベルギー支部の総評議会との確執をやわらげインターナショナルの団結を計る意図で文案を練った。 なおイタリアはマツティーニの運動から離れる若者が多く、バクニンはこの機会にマツティーニとの理論闘争を展開し各地にインタ

ンガリー1、ボヘミア1、デンマーク1、オーストラリア1、英国2、フランス支部（ロンドンに在ったコミュニード代表）2、ドイツ支部13（ロンドンにいるドイツ人は含まない）他。

会議は3日間代表の信任状の真偽を査問する（これは少数派バクーニン派の団体代表資格を問うものである）

議題

- ①労働者が政治分野で闘争することの必要性
- ②組織における連帯の必要性
- ・多数派（マルクス派）の構成員数40名、総評議会6名、ドイツ代表10名、スイス3名、米
- 国2名、スペイン1名（ラファルグ）ボヘミ
- ア1名、オランダ1名、ハンガリー1名他
- ・少数派（バクーニン派）構成員数24名、ス
- イン4名、ジュラ同盟2名（ギヨム、シュビ
- ッグエベル）ベルギー7名、オランダ4名、
- 英国支部5名、フランス1名、米1名、総
- 評議会1名（但し英国支部のうち4名は総評
- 議会員であり反マルクスであった）
- ・総評議会の働きかけで5名から成る委員会を

・イナショナルを創設する契機を作った。マラテスタはナポリ支部出身。

関係文書

- ・社会主義とマッツィーニ（伊文）
- 1871年
- ・イタリアのプロレタリアの編集部へ（仏文）
- 1871年11月
- ・反マッツィーニ論（仏文）1871年11月
- ・マルクスとの個人的関係（仏文）
- 1871年12月
- ・ガゼットローサ編集部への手紙（仏文）
- 1871年12月
- ・イタリアと国際労働者協会の総評議会（仏文）
- 1871年12月
- ・ミランのインタナショナルへ（仏文）
- 1871年12月
- ・ガゼットローサ編集部への手紙
- 1872年1月
- ・ローマのインタナショナルへの手紙
- 1872年1月
- ・シエルツセレットイへの手紙（仏文）
- 1872年2月・3月

9月5日

設けバクーニンの同盟及びスペイン連合諸団体の総評議会に対する反対を査問する。公開会議を開く。

決議

- ①総評議会の権限と権力に関する問題
- ②労働者階級の政治活動について
- ①につきベルギー代表は総評議会が政治セン
- ターになり特定の教論を押しつけ全協会を指
- 導することに反対を表明した。
- ・ギヨムはジュラ同盟の名において総評議会は
- 経済・政治の分野で指導センターではない、
- 総評議会が通信と統計収集局である限り総評
- 議会を締めつける意図はないとした。ス
- ペイン代表がこれに賛成。
- ・ラファルグとゾルゲが反論ハインターナシ
- ョナルは総評議会に負うところが大きいから議
- 会の権限は強くあるべきである。ラファルグ
- はヴォルテルが神に言及した金言を活用し
- 総評議会がなければ、これを作るべきだ
- とまで言った。更にゾルゲは人自治の擁護者
- は協会の頭はいらないと言う。しかしそれは
- 逆であって頭はいるのである。しかも脳の一

8月

9月

9月15日
16日

これらの文書でバクーニンの視点はマッツィーニにキリスト教的統一国家への政治的野心を見、マルクスに汎ゲルマン的人民国家への政治的野心があるのを指摘、総評議会の独裁的傾向を非難した。

イタリア連合がリミニで会議を開く、マラテスター、コスター、カーフェイロが参加、総評議会は最早インタナショナルを代表しないと宣言、この成行きは前年のロンドン会議によるものである。

チューリッヒ会議

イタリア側、マラテスター、コスター、カーフェイロ、ペザリ、ファネリ

スペイン側、アレルニイ、ファアガー、マルセロ、モラゴ

スイス側、シュビッゲール

バクーニンは国際秘密組織のための規約を準備する。

サンテミーエ会議

ハーグ会議の結果を受けてジュラ連合を中心

杯つまつた頭が：Vこれで出席者はマルクスを注視したと言われている。

マルクスは総評議会の振る権力とは物理的なものでなく道徳的なものだと言った。規則の改正にあたり票決は賛成36、反対6、棄権15、これにより総評議会は事前討議や手続きを要するが各支部連合の活動差止め追放等の権限をもつことになった。

金曜日の会議で総評議会の所在地をロンドンからニューヨークへ移転することも討議。賛成23、棄権9、これはマルクス派がブランキストの総評議会乗取りを恐れたからだった。エンゲルスがニューヨーク移転を提案、ヴァイアン（フランス代表ブランキスト）が反対。総評議会が大西洋を渡ればインターナショナルは最早存在しないとした。票決ニューヨーク賛成30、ロンドン14、バルセロナ1、ブラッセル1、棄権13。

・新総評議会会員の選出12名

・米国在住者を優先

・ロンドン会議からの懸案であった労働者階級の政治闘争について討論

に開く。

代表構成・イタリア連合6名、ジュラ連合2名（ギヨム他）フランス2名、その他支部から各2名づつ、米国22名（マルクス派から離れた人びと）

決議

(1)あらゆる政治権力の破壊がプロレタリアートの第一の仕事である。

(2)政治権力の組織はたとえそれが臨時のものだろうと既存の政府と同じくプロレタリアートにとっては危険である。

(3)万国のプロレタリアートは社会革命の達成に拍車をかけ、ブルジョワ政治とは別個に革命活動の連帯を確立しなければならない。

①マルキストは資本家の集団力に対抗するにはプロレタリアートが階級として闘う外はない。労働者はこれまでの古い党組織を作るのではなく社会革命に欠き得ない政治政党を創設しなければならない。政治権力の奪取がプロレタリアートの第一の義務だVとした。

②ブランキストはアストライキが革命闘争の武器であるが、バリケードも重要だ。特に強力なのが後者であるVとしてプロレタリアートの革命勢力を軍事組織に組織するよう提案した。

③ギヨムはジュラ同盟を代表してA政治不参加は政治的無関心ではなくブルジョワ政治を否定する特殊な政治形式である。これこそ労働者階級の政治でなければならない。

多数者は政治権力の奪取を言うが、少数者は政治権力の破壊を求めるVのだと述べた。票決は政治参加賛成29、反対5、棄権9。

・更にバクーニンの同盟を査問する委員会を設置し、マルクス、エンゲルス、ウロブレフスキー等がマルクス派を代表し、ギヨム、シュ

ビッグゲール、ツコフスキーその他がバクーニンを代表して構成した。資料と証人を査問して秘密同盟はインターナショナルの精神に反すると断定。決議では

- ① 市民バクーニンを国際労働者協会より追放
- ② 市民ギヨムとシュビッゲールは同盟のメンバーだから同じく追放
- ③ マロン、ボスケ、ルイ・マルシアンはインターナショナルの解体を策謀した罪により追放
- ④ モラゴ・ファルガ・ツコフスキー（バクーニ一派）は同盟から脱退したとして不問に付された

・バクーニンの罪科とされたもの

- a、マルクスの資本論ロシア語訳の中途放棄（これはバクの知らない間にネチャーエフが本屋に交渉してバクは革命に尽力すべきで本を訳す暇はないとした）
- b、インターナショナル内部に秘密組織を作ったこと

・ギヨムは釈明を求められ拒否。
シュビッゲールは言った「われわれは前もっ

て処断された。しかし労働者は多数派のこの決定を処断するだろうV
代表65名のうち少数派10名と多数派の中の12名が退場

・バクーニン追放採択賛成27、反対7
ギヨム追放採択賛成25、反対9、棄権9
シュビッゲール追放採択賛成15、反対17、棄権9、彼はギヨムと同じ理由でありながら一方が追放され片方が残る理由はないとした。この会議はインターナショナルアムステルダム支部の開催する会議に引きつがれ、マルクスはそこでインターナショナルの役割と未来について演説した。

・ハーグ会議が第一インターナショナルの閉幕で以後マルクス派はニューヨークへ総評議会を移し活動したが肝心のマルクスは資本論の執筆に没頭し運動は滞落。
ステクロフは記している「ハーグ会議で古いインターナショナルは死んだと言える。しかし歴史的観点からすれば協会は決して実りないものではなかった。

1872年
10月5日

チャーリッヒ発信によりバクーニンはラ・リベルテ誌の編集局宛てに自己の追放理由、強権的コミンニズムと自由連合コミンニズムの差異を述べ、マルクスの国家はラサールの造語による人民国家であること、その内実を指摘した。更に1873年には「国際労働者協会における二派の闘争」と副題した「国家主義とアナキズム」を執筆した。

資料1 仮規則

考慮することは

即ち、労働者階級の解放は労働者階級自身に依って奪取しなければならぬ。

即ち、労働者階級のための闘争は、特権と独占階級の闘争ではなく、平等の権利と義務及び階級支配の全廃を意味するのである。

即ち、労働者の労働手段の独占者への経済的従属は、それこそ生活の源泉であるが、そのすべての形式において隷属の基底に、すべての社会的不幸、心理的屈辱、政治的依存があるのだ。

即ち、労働者階級の経済的解放は、それ故、偉大な目標であり、これに対すすべての政治運動は、一手段として、従属しなければならぬ。

即ち、この偉大な目標に宛てたすべての努力は、これ迄各国における労働の多様な分業による連帯の欠如と諸国の労働者階級間における組合の友愛的紐帯がなかった為、失敗してきた。

即ち、労働の解放は地域的国家的なものでなく、社会的問題であって、近代社会の存在するすべての諸国を含む

むもので、その解決は多くの先進諸国が実際と理論において一致して働くことに依存している。

即ち、ヨーロッパの多くの工業諸国における労働者階級の現在の復活は、新しい希望を提起すると共に、古い誤ちにのめり込むのを厳しく警告し、また未だに関連性のない諸運動に対し即時に結集するよう呼びかける。

それらの理由によって、

委員会の署名会員は1864年9月28日、ロンドン在セント・マーチンホールでの公式会議の決議効力により国際労働者協会の設立に必要な処理した。

本国際協会及びこれに結集するすべての団体並びに個人は、人種、経歴、民族に関りなく、相互の活動及びすべての人に対する活動の基礎が、真理と正義と道徳であることを認め、これを宣言する。

人間及び市民の権利を主張するにあつての人間の義務は彼のみならず、義務を遂行するすべての人にとってあるのだと信じる。義務のない権利はなく、権利のない義務もない。

それ故、この精神において、次のような国際協会仮規則を起草する。

1. 本協会は諸国にある労働者団体の通信と協働の中央機関として設置する。また等しい目的は労働者階級の

保護、向上及び完全な解放とする。

2. 団体の名称は「国際労働者協会」The Working

Men's International Association - ヲーメンツ。

3. 1865年にベルギーにおいて、労働者評議会を開催する。これは国際協会に参加した労働者団体の代表連で構成される。評議会はヨーロッパに向け、労働者階級の共通の希望を宣言し、国際協会の明確な規則によって決定し、その仕事を成功させる為の必要手段を考察する。総会は一年に一回開催する。

4. 総評議会(The Central Council)はロンドンに設置し、国際協会に代表を送る諸国の労働者によって構成する。会員中より事務処理に必要な役員を選出し、会長、財政、書記等、各国の連絡書記を置く。

5. その年次例会について、総会は総評議会の年収の公開勘定書を受取る。総会は毎年大会によって指定されるその会員を増員する権限を有する。緊急の場合は例年の期限以前に総会を召集することができる。

6. 総評議会は各協働団体間の国際的代行機関である。一国の労働者は常に他国の同じ階級の運動について情報が得られる。即ちヨーロッパ諸国の社会状況についての問い合わせは同時的にかつ共通の方向においてなされる。ある社会で論議された一般の興味のある諸問題は、すべ

ての方面に伝達される。また即時に実際の処置が必要な際は、例えば国際的紛争のような場合、結集した諸団体の活動は同時的で均一なものとする。適切と考慮される際は総評議会が諸国または諸団体に對し、提案の先導性を執るものとする。

7. 各国における労働者運動の成功は団結と結集の力によってしか達せられない。また他方、国際総評議会の有効性は労働者諸団体が各国毎の少いセンタースと接し、より、するか、または数多くの小さな関連性のない地域団体と接し、より、するか、のいづれかに大きく依存するものである。国際協会の会員は自国の関連性のない労働者諸団体を一国毎にまとめ、中央国民機関によって代表させるより最大の努力を払うべきである。しかしながら目明なのは、この規則の適用は、各国の特殊な法律に依存するであろうから、法的障壁のない限り、独立した地方団体が直接ロンドン総評議会に連絡することは認めない。

8. 1864年9月28日に選出された委員会が第一回総会まで臨時総評議会として、諸国の労働者団体を連結させ、英国において会員を登録し、総会の召集準備を処理し、総会に提出する重要課題を諸国の団体及び地域団体と討議する。

9. 国際協会の各会員は自国から他国へ移動した場合

団体の労働者から友愛的な支援を受ける。

10. 友愛的協働の絶えざる紐帯によって団結し、労働者団体は国際協働会に参加してそれぞれの汚れなき組織を確保しよう。

出典（1864年9月28日設定さ

れた国際労働者協会の呼び

かけ及び仮規則）

Bakounine oeuvres completes

Vol 2 Appendix XI

（但し呼びかけは含まれてゐない）

* a この仮規則はマルクスの起草になるもので、彼は「眞理と正義と道徳」の語はもと「理想主義者の夢」で好まないのだが、当時の運動状況によって「行動では大胆に、やり方はおとなしく」のモットーで採用したと言う。ステクロフの解説では「マルクスはそうした言葉自体を嫌うのでなく、高調子の抽象語で階級闘争の現実を隠すのを好まないのだ」としてゐる。

資料2 民主社会主義者同盟 プログラム

1. 国際同盟はわがプログラムで宣明にした原則に基づき、全体革命を組織し、加速化するのを支援するために設置した。

2. これらの諸原則に従って、革命の目的は外でもなく、(a)ヨーロッパに於ける宗教的、貴族的、ブルジョワ的権威と権力の廃止。従って、その政治的、法律的、官僚的、財政的諸制度と共に現在の国家をすべて破壊する。(b)新社会の再建は、自由な集団労働、集約化した所有、平等と正義を出発点とするものである。

3. われわれが考える、否むしる事情の切迫によって今日提示されている革命は、本質的に国際的むしろ普遍的性格をもつものである。ヨーロッパにおける既得権益と反動勢力の脅迫的な強制的視点からして、経験と組織によって設定された恐るべき機構へ接近するには、またブルジョワジーと労働者間には至る所で根深い分裂が力を得ているのに鑑み、一国革命はすべての他国へ即時に伝播しない限り成功しないし、またこの普遍性の諸要素を含まなければ言い換えると、明瞭な社会主義革命、国家を破壊し、平等と正義によって自由に創出ししない限り

革命は国境を越えて普遍的性格を持ち得ないのである。現在運動の力を有し、この世紀での偉大にして唯一の眞の力、活力と高揚力があるのは労働者であるが、それは世襲財産と資本で保護されたすべての制度の崩壊の上に労働の現実的完全な解放がなければならない。

4. 来るべき革命が普遍的であるならば、同盟または反逆に誠実である者は、それを準備し加速化するのも普遍的でなければならない。

5. 同盟は2ヶの目的を遂行する。(a)同盟は政治、社会、経済及びすべての思想問題に就き諸国の民衆の間に眞実な理念の伝播に最善を尽す。その為誌紙、パンフレット、本並びに諸団体を設立することによって活発な運動を展開する。(b)ヨーロッパのみならず米國までも、わが理念に同感する知的で活動的で分別のある善意の人びとを登録し、献身的な革命者による不可視の網の目を作り、同盟によって強化する。

資料3 秘密組織プログラム

1. 同盟の無神論に立脚し、教義を排し、科学でもって信仰に代え、人間の正義によって神性に代える。

2. 先づ同盟は階級を完全に全体的に廃絶し、男女両

性の政治的、経済的、社会的個人の平等を支持し、この目的に宛て、まず相続権の廃止を要求し、かくしてすべての人の所有は将来において、各人の生産に比例するものとする。またブラッセルにおける労働者会議による決定に従って、土地、労働手段、及びすべての資本は全社会の集約的財産となり、労働者によってのみ活用される。別言すれば農業及び工業組合によって活用されるのである。

3. 同盟は男女両性の子供達の發育手段の平等を確保する。ゆり籠から「管理、保育、教育等科学、工業、技術のあらゆる過程に習熟させるが、これは平等の効果の第一のものが経済的社会的なもので、すべての人工的不平等と虚偽、不平等の社会組織の歴史的所産を除去することによって、個人間における自然の平等が著しく増大するであろう。

4. すべての独占に敵意を持ち、共和形態以外の政治形式を認めず、反動に加盟するものすべてを拒否し、また資本を克服する労働者の勝利以外を目標とするすべての政治活動を拒否する。

5. 同盟はすべて現在の政治的権威の諸国家はその機能をそれぞれの国において公的奉仕作業の単純な管理にまで縮小すべきで、かくして農業と工業の自由な諸団体

から成る全体組合へ併合されるものと認める。

6. 社会問題に対する具体的で最終の解決は、国際的労働者の連帯を基礎として実現する。そこで同盟はいわゆる愛国主義や国家間の競争に依る政策を拒否する。

7. 同盟は自由によるすべての地域的諸団体の全体組合である。

(出典 ミッシェル・バクーニン、セレクトッド・ライティンクス、アーサー・レーニング編)

同盟は1868年に創設されたプログラムはいづれもバクーニン記)

(ノート)

バクーニンの伝言を編集し翻訳を終え、第一校をすませた。さすがにホットする。A伝言では1842年のドイツに於ける反動Vから始めて、1971年のルクリュ宛て手紙まで、論文の書かれた編年記風ではなく、主題によって選択してある。A反動Vから出発したのはバクーニン自身がそれを社会で活動を開始したデヴュ作だと自

認しているからだ。量から言えば微々たるもので、せいぜい彼の中編論文の2・3編分しかない。またアンソロジの性格上、尻切れトンボの感もまぬがれない。それにかような形式ではどうしても編者の主観や好みが出やすく、早く言えば見識を疑われかねないものだ。しかし私としては論旨を切り刻んで提出するのではなく、主題について導入、展開、結論を求めてまとめた積りで、特に訳文に創作は施さず、生硬でも原文に忠実であろうと努力した。バクーニンの書きものの特長はギョムが嘆いていたように設計図は引いても建築は他人に委せる態のものだ。また内容からみると思弁的論議にしては行動の熱力がほとほとと行間から湧きあがり、状況に就いての発言がまたいつの間にか哲学談議になるようである。独文、仏文をよくした彼のことだから、文章の骨組として論理性を備え、それが美感をくすぐる程で、また何よりもペーソスのたゞのような捨て難い味いである。バクーニンはドイツローマン派から人生は「憂い」悲しみ、憂いであると学んでいる。しかし彼の生きた時代、特に19世紀後半はヨーロッパ史の変動期だった。フランスは第二帝政からパリコミューンを経て再び帝政へと変り、プロシアは普仏戦争(1870年)で勝利した自信からドイツ帝国創設にあたり、イタリアはマッツイーニ、ガル

バルデイの国民運動を経てイタリア統一を目指し、ポーランドを中心とするスラブ族は帝政ロシアの安泰を脅していた。また産業革命の発展は農村の崩壊をもたらし、都市への人口流入は必然的にプロレタリアートの興隆となり、ここに資本の搾取に対する労働を中心とした労働者階級の団結をうながす気運が生じた。A万国の労働者よ、団結せよVとの「共産党宣言」(1848年)はフランスの2月革命の雰囲気の中で、それまでのむしろ旗一揆主義かユートピア風の教論的社会主义革命諸派に活動の新天地を示したのである。バクーニンはインターナショナルに参加した(1868年)。だが普仏戦争以後のマルクスはインターナショナルの創設者であるにもかかわらず、民族主義的或は一國主義的ニュアンスをもった代表制から成る民主的中央集権によって総評議會を統制し、バクーニンの主唱する自由連合、自治の構想によるインターナショナルの内実を破壊して行ったのである。バクーニンはこれを汎ゲルマン主義、国家主義として激しく攻撃して、理論闘争を展開した。むしろバクーニンに対しては汎スラブ主義者のレッテルが貼られたが彼のスラブ主義は後のツァリズムとギリシア正教を中心にスラブ諸国に君臨するという偏狭なナショナリズムとは異り、ポーランドを初め今日の東欧諸国に遍在するス

ラブ族を糾合して帝政ロシアを崩壊させるという腹案で活動していたのだ。ともあれこの期のインターナショナルはプロシアを中心とするナショナリズム(民族主義)の群生によって一敗地にまみれた。その合言葉はAとにかく統一だ、自由はそれからだVというのだ。奇しくもその後半に世界史に登場することになる日本がプロシアの憲法、軍隊制度、文物を輸入して、結局ドイツと運命を共にし、敗戦に至る過程はわれわれにとって示唆するところが大きく、これが単にヨーロッパでの出来事と看過するのは許されない。

バクーニンの今日的意義の最大のものは、インターナショナルに於けるマルクスとの闘争を通じて、アナキズムとマルクシズムの差異、裂け目を身をもって示していることだ。確かにこの二つの主義主張はフランス大革命以来の平等思想を軸に、自由を基調とする連合主義と国家を容認し統治形態を導入する強権的社会主义(マルクス主義)に分派した。今日第三諸国やアジアで独立した幾つかの国家はそれぞれ民主共和国や社会主义共和国の名称を採用しているが、その内実は既にバクーニンが指摘したように社会主义と民族主義の混淆であり、政治権力を担当するのは中産階級「インテリ」知的技術的エリート「テクノクラート」である。従って当然官僚制度が

復活し、ブルジョワ的文物の反革命と闘うと同時に台頭する権力内部の官僚主義との闘いになるのは現に新中国が体験し証明している。いづれそれらがこの地球に生存する人類の生活体験としての政治、経済、社会諸制度において経なければならぬ必然の条件だとして、アナキズムはその行手に赫々と目標を指し示しているのだ。

「バクーニンの伝言」はいづれも新訳である。60年代にバクーニン文書を編集し詳細な註釈を出したアーサー・レーニングに負うところが多い。彼のバクーニン関係の

バクーニン文書の集成者 梅田順子 たち

もしバクーニンの著述と書簡のすべてが現存し、それらを全集として刊行できたとするなら、その量はマルクス、エンゲルス全集よりもはるかに大きくなるであろう。とりわけ書簡はとてつもない数に達するようであるが、現存するのはおそらくそのごく一部であろうし、既に公刊されたのは全書簡の一パーセントにも満たないように思う。何度も試みられた全集、選集はほとんどがさまざま

文献収集と校訂がなかったら、私達はいつまでも一方的に流されるバクーニンに対する中傷と悪罵の間からしか彼の真意を読みとるしかなかったであろう。今ようやく真理の探究に於て極めなければならなかった徹底性とロシア人のよさ、なつかしさを持つ巨人の姿がその片影を現わしたのだ。

「伝言」中の小見出しと頭註は読者の便を考え編訳者が挿入した。また文中の（一訳註）も同じ意図で作ったものである。以上

まの理由で途絶しており、真に全集の名に値するものはさしあたって期待できそうになく、現在きわめて緻密な考証を経て刊行中の「バクーニン文書」と「全集」がどこまで著述と書簡を包括できるか興味あるところである。全集の不存在という弊を補うため、あるいは冗長、散漫、断片的なバクーニンの著述を理論的体系的に再構成するために、構想を新たに次々とスタートするアンソロジ

も相当あり、本書に収められている「バクーニンのメッセージ」もその一つに数えることができるのだが、それらのすべてがアンソロジに固有のいくつかの欠陥をもつことはまちがいないし、またやむをえないところである。全集、選集、著作集、アンソロジの数は大小とりまぜると五〇を越えると思うのだが、その名誉ある第一走者は一八七七年つまりバクーニンの死の翌年に刊行された「バクーニンとラディカリズム」であったようである。

バクーニンの著作集やアンソロジの編者のうち、バクーニンと思想傾向を同じくする数名のバクーニンとの接点をわずかつつ紹介しておく。

最初にあげるべきは、バクーニンの原稿を『神と国家』の標題で編集、刊行したルクリュとカフィエロであるが前者については石川氏の著書があるし、後者はその後転向したので割愛し、タッカーについて簡単にふれておく。タッカーはバクーニン文書の集成者ではないが、『神と国家』の英訳者として日本では落すことができない。前世紀末から今世紀初頭にかけてタッカーの名声は赫々たるものがあつたらしいことはエルツバッハーやショウの著書からうかがわれるが、今では個人主義的アナキズムの代表的主張者としての評価もさることながら、ヨ

ロッパのアナキズム文献の翻訳者、それらを含むアナキズム文献の発行者として著名であり、戦前日本の『神と国家』の翻訳のいくつかはタッカーの英訳に従っているはずである。ヤロスによると、タッカーはごく若いころに宗教的信仰を失ない、戦闘的無神論者となり、ブルードンの著書でアナキズムやアナキストという用語に初めてぶつかり、『神と国家』を英訳したもの、クエーカー的情調は失わなかった、という。

次はネットラウとギヨームの番であるが、二人についてはすでにいくつかの紹介があるので、ここでは二人が関係したフランス語版のバクーニンの『著作集』について定説を補正しておく。厳密に言う『著作集』は二つある。第一に、ネットラウ編の一卷本の『著作集』（一八九五年）。第二に、これを第一巻として組み込み、第二巻以降をギヨームが編集した『著作集』。ふつう第一巻をネットラウ、第二巻以降をギヨームが編集した『著作集』として知られているのは後者をさす。従って第二巻以降が一九〇七年から逐年または隔年刊行であるのに第一巻のみはそれよりもずっと早く一八九五年（一説によると九四年）とされるのである。『著作集』第一巻の初版（初刷）本は存在しないはずであって、日本には百セツト以上あると思われる『著作集』の第一巻は第二版以

降（ことによると第三版以降。第二版は『全集』となっていたかもしれない）となっていては不都合である。いずれも同じ出版社から出され、全巻が社会学叢書のなかに入られ、第二巻以降はそれぞれその番号が附せられているのに、第一巻のみは無番号と4または37番の版があるのはこうしたせいであろう。第一巻と印刷された版本の最初の刊行年、それが一八九五年版から通算して何版になるか、これについては未詳である。未刊の第七巻のマヌクリプトはリュシアン・デカーヴまたは消滅した出版社の後継者のいずれかの所有するところとなったが、現在は国際社会史研究所にあると思う。この『著作集』は第一巻にネットラウ、第二巻にギヨームの長文の論文を掲載したぜいたくなもので、つい先年までは最も有益な著作集であったが、成立経過にやや不手際がみられるし、第二巻以降がなぜかギヨームの単独編集（ヴェイユウミエによるとネットラウの協力はあったはず）とされている。この間の消息はギヨームの短かい自伝、または『著作集』第六巻の刊行された翌年のある雑誌のギヨームに捧げられた特別号が教えてくれるかもしれないが、今のところは謎である。

『共産党宣言の種本』で著名なチエルケゾフもまたバクーニン文書の集成者の一人であった。彼については面

によるとこの版の第一巻はE・ロルフス、第二、三巻の編集はネットラウで、前者についてはよくわからないがおそらくサンジカリストと思われる。

その論文がいくつか邦訳されているファブリも集成者の一人と数えるべきであろう。彼の関与した実体としての著作集（全二巻）は一九二二―二三年に刊行されたがギヨームの論文が付けられている。

スペイン語でのバクーニン文書の集成者としてサンティランがいる。アナルコ・サンジカリズムの綱領を最もよく説明した「ブレナン」とされる『革命の経済組織』の著書であり、スーシーとならぶ世界のアナキズム運動の最長老として今なお健筆をふるっている、あのサンティランである。ネットラウの自伝ともいうべき論文によると、サンティランが翻訳したバクーニン文書は『全集』として五巻（予定では全一二巻）まで刊行され、ネットラウはそれぞれに序文をつけ、彼自身は未見である第六巻のためにも序文を執筆した。これらは一九三七または三八年にバルセロナで新版が出されたが、彼は新しい第七巻のために、一九三九年の初頭に序文を執筆したが、今は（自伝執筆当時の一九四〇年）所在不明である。

第二次世界大戦以降のものなからは、アルドレッソ、ケナフィック、マクシーモフ、レーニングの名前だ

識のあった石川三四郎氏の「チエルケゾフを憶ふ」が『労働運動』大正一四年九月一日号に発表されているから省略するが、近代評論社版のバクーニン全集の底本にしようとしていたロシヤ語版全集とはチエルケゾフの関係した著作集のどれかであろうし、訳者はおそらく水沼熊氏の予定であったと思う。予告のなかにゴロス・トルーダ版に収録されている『国家制度とアナキー』（但し、同版では『国家とアナキズム』とされていたらしい）がないのは長文のためであろうか。バクーニンのこの著述は一九〇五、一九一七年の革命のときに新版が出されたし、おそらく戦後コロジュがドイツ語訳を準備していたようであるが、いずれも詳細は不明である。日本への最初の紹介はマルクスの『摘要』の抄訳を通じて村田陽一氏によって昭和二三年に行なわれた。チエルケゾフの論文「資本のコンセンストレーション。マルクスの誤謬」は第五次の『労働運動』に訳出され、近くリプリントされるが、題名は「マルクス・資本集中説の誤謬」とされている。チエルケゾフのフルネームはヴァルラム・ニコラエヴィチ・チエルケゾフ、生年は一八四六年、そして本名はドズハン・アスラノヴィチである。

ドイツ語の『全集』の第三巻は対マルクス関係の諸論文を収録したものとよく知られているが、マウス等

けをあげ、ここ一〇年ぐらいの集成者は省略する。

最後に、本題とは少しずれるが、日本語版の全集について今のところ解明できなかったことを二つ記してご教示を請いたい。

第一に、昭和四年春に発表された自由書房版の全集の計画内容である。これは社会理想研究会が近代評論社から刊行した全三巻本の胎児であるが、どのような内容であったのだろうか。これはまもなく近代評論社がひきつぎ、昭和四年一〇月中旬に、延島英一氏等によって進められた別の全集計画を吸収し、やがて全七巻本として発表された。別掲の写真がそれである。全七巻本の計画は当時の雑誌からも知られるし、クロボトキンを詩によんだ西村陽吉氏の雑誌『芸術と自由』昭和五年一月号にも広告が掲載されているはずである。現実に刊行されたのは計画とはかなりの相違がある全三巻であって、計画と事実の相違の経過は川合仁氏の回想でも詳らかにならぬ。幸運にも何人かの関係者が今なお活動をにつけておられるからこの間の経緯を明らかにしておいてほしいと思う。ともかく自由書房版は日本語版全集の最初の公表された計画であるだけに、早くそれを知りたいものである。なお途中で終り結局三巻本となったこの全集をそろえて所蔵している図書館を私はただ一つ知っている。

広島大学森戸文庫である。

第二に、この全集には「東京のK・ミヤタ」なる人物が重要な役割を果たしたことが別掲の写真から知られる。これはエーリッヒ・ミューザムの編集になる月刊誌『フナール』に掲載された「日本のアナキズム運動から」の全文であるが、掲載は一九二九年一〇月号であると思う。当時、日本へこの校正刷が送られ、一九三〇年一月号として発表されているが、私の手もとにある資料からすれば第四巻第一号（一九二九年一〇月号）とせざるをえない。この記事の内容によると、「K・ミヤタ」氏はバクーニン全集、ネットラウ『無政府主義思想史』（新居格訳）、クロボトキン全集では重要な仕事をし、エリゼ・ルクリュの伝記を執筆しようとしていたことになる。「K・ミヤタ」氏は誰かのペンネームと思うのだが、記事の内容からして石川三四郎、久保譲、麻生義、新居格などの諸氏のいずれかのような気がするし、それとは異なる全くの別人のような気もする。ペーコンがシェークスピアというペンネームを使ったのなら大問題となるが「K・ミヤタ」氏とは誰のペンネーム、あるいは何者であるろうか。

補遺

(1) 自由書房と同書房版の著作集については「黒色戦線」「自由連合新聞」などで追跡調査が可能である。それによると、著作集の名称は「バクーニン選集」（全八巻）で、昭和四年九月より毎月一冊ずつ刊行の予定であった。

(2) 「K・ミヤタ」氏は「宮田晃一」氏かもしれない。なお、『フナール』誌はマールブルク大学が所蔵している。

(3) 川合仁氏にバクーニン全集の発行人になってもらうべく同氏を訪れた三人の学生は、萩原晋太郎氏の編書によると、昭和三年五月現在、榎本桃太郎、谷本弘之の二氏がA.C.学生連盟、平松義輝氏が「ラ・アナルキスト」に所属している。川合氏と全集については大沢正道、遠藤斌の二氏、榎本氏については相沢尚夫氏の、それぞれ最近の論文がある。

(4) ロルフス（正確な発音不明）の編集したアンソロジーが、バクーニン死後一〇〇年にあたって、近くリプリントされるようである。